

令和6年8月10日

令和5年度 特別の教育課程の実施状況等について

東京都		
学 校 名	管理機関名	設置者の別
明晴学園 (外0校)	学校法人明晴学園	私立

1. 学校における特別の教育課程の編成の方針等に関する情報

学 校 名	特別の教育課程の編成の方針等の 公表 URL
明晴学園	https://www.meiseigakuen.ed.jp/summary/summary

※必要に応じて行を追加すること。

2. 学校における自己評価・学校関係者評価の結果公表に関する情報

学 校 名	自己評価結果の公表 URL	学校関係者評価結果の公表 URL
明晴学園	https://www.meiseigakuen.ed.jp/summary/assessment	https://www.meiseigakuen.ed.jp/summary/assessment

※必要に応じて行を追加すること。

3. 特別の教育課程の実施状況に関する把握・検証結果

(1) 特別の教育課程編成・実施計画に基づく教育の実施状況

- 計画通り実施できている
- 一部、計画通り実施できていない
- ほとんど計画通り実施できていない

(2) 実施状況に関する特記事項

※(1)で「一部、計画通り実施できていない」又は「ほとんど計画通り実施できていない」を選択した場合は、必ず記載する。

(3) 保護者及び地域住民その他の関係者に対する情報提供の状況

- 実施している
- 実施していない

<特記事項>

バイリンガル・バイカルチュラルろう教育シンポジウムを3年ぶりに一般公開し、「手話を生きる～明晴学園の15年～」というテーマで開催した。明晴学園のこれまでの実践を振り返りながら、日本手話による教育の重要性についての認識を深めた。

地域に対しても、2021年に品川区手話言語条例が制定されて以来初のイベントとなる「手話&デフリンピックフェスタ」が、品川区聴覚障害者協会の主催で明晴学園を会場として開催された。中学部生徒による「手話体験コーナー」や教職員による「手話を楽しむ会」を行い、品川区において日本手話の理解が広まるように協力した。

3. 実施の効果及び課題

(1) 特別の教育課程の編成・実施により達成を目指している目標との関係

2023年5月に新型コロナが5類に移行したことで、教育活動が全面的に復活し、学校行事も一般公開できるようになった。これにより、校内での子ども同士や外部との交流が活性化した。さらに、新型コロナの影響で前年度に見送った中学部の海外研修も実施できた。渡航先は韓国で、韓国で開催された世界ろう者会議への参加や現地のろう学校との交流を行った。これらによって、本校の教育目標のひとつである「豊かな人間性・社会性をもち、多文化共生社会・国際社会に生きる人を育てる」を十分に達成することができた。

また、明晴学園の独自教科である「手話科」について紹介した『知る・学ぶ・教える日本手話～明晴学園メソッド～』（学事出版）や、明晴学園の子どもがモデルとなって日本手話とろう文化について紹介した『日本手話のパスポート』（小学館）の発行に協力した。「手話科」は第一言語としての日本手話をしっかりと育て、概念や認知・思考の基盤を築き、自己肯定感や異文化尊重の態度を高めるのに重要な教科となっている。在校生も卒業生も様々なコンテストや大会、メディアなどの分野での活躍が見られており、「手話と日本語、ろう文化と聴文化を学び、自分に自信を持って社会で生き抜く力を育てる」という教育目標も達成できていると言える。

(2) 学校教育法等に示す学校教育の目標との関係

コロナの緩和により、幼稚部、小学部、中学部とも協働的な学びを大幅に増やすことができた。幼稚部は月ごとに決められたテーマ（動物、仕事など）に基づき、子どもたちの興味や関心に沿った活動を行った。月末には、他学部の子どもや教員、保護者に対して活動の成果を発表する場を設け、子どもの発表スキルや社会スキルを伸ばすことができた。小学部は、市民科（道徳、特別活動、総合的な学習の時間を統合した品川区独自の教科であり、本校も導入している）の授業において、1年生から6年生までの縦割り活動を通じて映画制作に取り組んだ。脚本、演出、撮影、編集などすべての工程を子どもたち自身が担当し、子ども同士の協働的な学びやICTの活用が多く見られた。中学部も学校全体の最高学部として、運動会や文化祭などの学校全体の行事においてリーダーシップを発揮した。また、高校受験に向

けて、それぞれの志望に合わせて個別最適な学びの場を充実させた。

これらの取り組みにより、子どもたちは多様な経験を通じて成長し、社会で生き抜く力を育んでいる。

4. 課題の改善のための取組の方向性

「手話科」と同様に「日本語」という独自教科についても、カリキュラムや教材など15年以上の蓄積があり、中学部において高校受験をはじめ、日本語能力試験や日本語に関するコンクールにおいて成果を出している。今後とも日本語に関する取り組みを充実させていきたい。

コロナの緩和のおかげで、学校全体の教育活動は以前のように活性化を取り戻し、内容的にも充実したものになっている。その一方で、乳児に対する人工内耳装用が標準しつつあり、保護者のニーズはまさに「人工内耳も、手話も」となっている。学校、保護者、言語聴覚士との連携と相談の上、人工内耳と日本手話に関する研究協力を継続していく。また、児童発達支援事業所「明晴プレスクールめだか」は利用者の負担をなくすためにも、校内の早期支援サービスという位置づけでサービスを開始した。登録数は徐々に増えているもの、幼稚部入学にはつながっておらず、フェイスブックやYouTubeなど、広報に力を入れていく。